慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コスモポリタンとしてのシャミッソー
Sub Title	Chamisso als Kosmopolit
Author	秋山, 大輔(Akiyama, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.227(68)- 240(55)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コスモポリタンとしてのシャミッソー

秋山　大輔

1

『ペーター・シュレミールの不思議な物語』*Peter Schlemihls wundersame Geschichte*(1814)は後期ロマン派の重要な作家の一人であるシャミッソー Adelbert von Chamisso(1781-1838)の代表作である。これは当時猛威を振るっていたナショナリズムに晒されながらも、コスモポリタン的世界観の実現という理想のうちに生まれた稀有な作品であるとも言えるのではないだろうか。ところが従来のシャミッソー研究は、彼のコスモポリタン的世界観の集大成であると考えられる『世界旅行記』*Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18*(1821, 1836)にほとんど目が届いていなかったのは言うまでもなく、この作品を解釈するうえでも主人公の影、および影の喪失というモティーフがいったい何を意味するのかというその謎解きに終始していたことは否めない。その代表例としてしばしば紹介されるのがトーマス・マン Thomas Mann(1875-1955)の解釈例である:

> 「……影の喪失の意味することは何だろうか。……『ペーター・シュレミールの不思議な物語』における影は、あらゆる市民的な堅実さや人間の帰属性の象徴になっている」[1]

シャミッソー研究にはこれが重くのしかかってきたのか、その後もこの作品は市民社会の中での疎外の物語という評価がすっかり定着している。[2] しかし実際のところは、たしかに主人公の影、および影の喪失はきわめて謎

めいているものの、本来それは象徴として何かしらの意味をもつものではなく、シャミッソーのナショナリズムとコスモポリタニズムの内面的相克とその克服の跡、あるいは理想としてのコスモポリタニズムがこの作品の中に表現されているのではないだろうか。また彼が幼年時代に祖国を追われ、フランス人でありながらドイツ解放戦争では敵として祖国に相対さなければならなかったという過酷な運命がもたらしたであろう精神的危機を脱するためにどうしても書かずにはいられなかった物語なのではないだろうか。

本稿はシャミッソーにコスモポリタン的世界観が育まれてゆく過程を考察する。そして彼の代表作が彼にとってどのような意味合いをもつ作品だったのかをその解釈として示し、[3]コスモポリタンとしてのシャミッソー像を浮かび上がらせることを目的とする。

2

コスモポリタニズムとは、「個人を国家・民族を超越した直接普遍的世界の一員として位置づける世界観」であり、「その立場に立って一つの世界国家を実現しようとする思想」である。そしてコスモポリタンとは、このような「コスモポリタニズムを信奉する人」、すなわち「一つの国や民族にとらわれず、全世界を自国として考え、生活する人」のことである。[4]『カント事典』では「世界市民主義」と訳されているこの言葉は、17世紀後半から用いられ、18世紀後半に啓蒙思想と結びついて広がった。[5]

本章ではその啓蒙思想に見られるコスモポリタン的世界観としてルソーJean-Jacques Rousseau(1712-1778)のそれを取り上げる。というのも啓蒙主義者ルソーとシャミッソーのつながりは伝記でもしばしば触れられており、[6]シャミッソーのコスモポリタン的世界観の形成にもルソーの影響があると仮定すれば、ここでルソーのそれがどういうものであるのかということを踏まえることは決して無意味ではないと考えるからである。

「コスモポリタン cosmopolite［仏］」という言葉は、ルソーの諸作品の中で『人間不平等起源論』*Le Contrat Social*(1762)と『エミール』*Émile ou de*

L'Éducation(1762)で登場する。[7]

『人間不平等起源論』：

「……市民法がこうして市民たちに共通の規制となったので、自然法はもはやさまざまな社会と社会との間にしか行なわれなくなった。そこでは万民法［国際法］の名の下に、通商を可能にし、自然の憐れみのおぎないをするために、自然法が暗黙の約束によって緩和されたのであった。そこで自然の憐れみは、人と人との間でもっていたほとんど一切の力を社会と社会との間では失ってしまい、もはや諸民族をへだてる想像上の境界を乗り超え、彼らを創造した最高の存在に倣って人類全体をその善意のなかに抱擁するような、幾人かの偉大な世界市民的な人々の魂のなかにしかもはや存在しなくなった」[8]

市民法、および自然法に関する議論はさておき、ここでルソーはコスモポリタンとして諸民族を創造した最高の存在であるキリストを念頭に置き、それを肯定的な意味で使っている。

『エミール』：

「……あらゆる部分的な社会は、その範囲が狭く、固く団結しているばあい、大きな社会から離れていく。愛国者はみな外国人に対して苛酷である。外国人はたんなる人間にすぎない。愛国者から見れば、かれらは何者でもない。これはさけがたい不都合だが、たいしたことではない。かんじんなことは一緒に暮らしている人々にたいして親切にすることだ。スパルタ人は、外にたいしては野心家で、けちんぼで、不正な人間だった。しかし、彼らの都市のなかでは、公平無私、一致協力の精神が支配していた。書物のなかで遠大な義務を説きながら、身のまわりにいる人にたいする義務を怠るような世界主義者を警戒す

るがいい。そういう哲学者は、ダッタン人を愛して、隣人を愛する義務をまぬがれようとしているのだ」[9]

ここで一転して彼はキリストの教えをおろそかにしているとコスモポリタンを非難し、それを明らかに否定的な意味で使っている。彼はこのようにコスモポリタンを相反する二つの意味合いで解釈しているが、コスモポリタンのあるべき姿としてすべての他者へ愛を向けるように希求していることは、これらの引用からもまったく疑う余地のないことであろう。そしてルソーのコスモポリタン的世界観に関連して、そのような愛が彼の場合、偏狭なナショナリズムに陥る愛国心には決してつながらないことを見逃してはならない:

「かれは理性の時期ののちにもその国にとどまることによってのみ、かれの父祖たちが結んだ約束を暗黙のうちに確認しているものとみなされる。かれは、相続権を放棄できるのと同じように、祖国を捨てる権利を獲得する。さらに出生の場所は自然の賜物の一つだから、自分の出生地を見捨てるとき、人はそれを譲り渡すわけだ。厳密な権利によれば、各人は、どこで生まれようと、自分の責任においていつでも自由でいられるのだが、自分の意志で法律に服従すれば、危険から保護される権利を獲得する」[10]

ここで表明されているのは自由な意思に基づいて祖国を放棄してもよいということであり。これらことからルソーは偏狭なナショナリズムにときとして陥る愛国心を否定するコスモポリタン的世界観をもっていたと言えるのではないだろうか。

3

『ペーター・シュレミールの不思議な物語』はあくまでも小説であり、その解釈においてシャミッソーの人生航路を辿り、それをペーター・シュ

レミールの辿った運命と照らし合わせることに否定的な見解も少なくないであろう。しかし本稿の観点の場合ではこの方法が有意義な解釈例を付け加えるために確かな羅針盤になると考える。

本章ではまず軍人としてのシャミッソーの来し方を主として自身の言葉で記した『世界旅行記』の導入部、および書簡で考察する。引き続き『ペーター・シュレミールの不思議な物語』に前で考察したことを前提とした解釈例を付け加える。これによって彼にコスモポリタン的世界観が育まれてゆく過程と彼の代表作が彼にとってどのような意味合いをもつ作品だったのかがその作品解釈として示され、コスモポリタンとしてのシャミッソー像を浮かび上がらせることができると考える。ただしシャミッソーはルソーのような思想家ではなく詩人であり自然研究者であるためか、彼のコスモポリタン的世界観を確証する論文はなく、考察が対象としている期間(1796-1815)の書簡を精査した限りでも彼が意識的に「コスモポリタン Kosmopolit［独］」という言葉を使っている箇所はない。[11] したがって本章がどうしても推測の域を出ないことをあらかじめ断っておきたい。1781年、シャミッソーはシャンパーニュ地方のある古い家系に由来するボンクール城で生まれたが、その8年後に勃発したフランス革命の火の手がこの城にも及び、1790年には早くも祖国を後にしなければならなかった:

> 「幼年時代の記憶は私にとってためになる本であり、その中であの熱狂的に興奮した時代が私の鋭く研ぎ澄まされた観察眼の前に差し出されるのである」[12]

家族とともに生地を追われた彼はフランス、オランダ、ドイツの各地をさまよい、数々の困難に耐え忍んだ末にベルリンに辿りついた。1796年、彼はフリードリヒ・ヴィルヘルム二世の夫人付き小姓となった。その2年後にはフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の統治下で、プロイセン・ベルリン駐屯軍の歩兵連隊で軍役につき、ここから10年間におよぶ軍人としての生活が始まった。以下、軍人としてのシャミッソーの来し方をまとめる。

31. 03. 1789　見習い士官としてベルリン駐屯軍歩兵部隊に配属される:

「拳で自分を殴りつけたい。こんなみすぼらしい世間ですごしていては、何もすることができないし、楽しみも何もないし、そうかといってたいして苦痛を味わうわけでもないが、何者になることもできないし、何かを手に入れることもできないではないか」[13]

一. 10. 1805　ベルリン駐屯軍歩兵部隊がベルリンから離れる:

「私たちは机、椅子、ベッド、その架台、それに簡易用便器まで運ばなければならず、その辛さは3マイルも歩けば、疲弊して卒倒するほどである。しかもこの部隊では私を驚愕させる無秩序がはじめからのしかかっていた。すなわちそれは食料が絶対的に不足しているということである。荷物を運んでくれる馬も欲しかった。そのため凍てつく寒さを防ぐためのもの以外は何ももってこなかったのであるが、それでも当然のこととして『ホメロス』と筆記用具はもってきていた」[14]

19. 03. 1806　常駐部隊としてハーメルン要塞に入る。[15]
21. 11. 1806　ハーメルン要塞が無血開城する:

「輝かしいものは軍人と戦争である。……悪党から世間知らずの人たちに向けて話される国家や民族は信じるに足りないものであるにすぎず、芸術、宗教、倫理、学問が夢想者という名の個人によってしか育成されなくなってしまったこのような痩せ衰えた時代においては、何から何まで無条件に思想になり、名誉になる。貨幣のほかに唯一生き生きとしているものが名誉である。そしてこの名誉に仕える者が軍人であり、戦争は名誉に奉仕するものである」[16]

11. 01. 1808　最終的に陸軍中尉の階級で退役する。

このようにシャミッソーは出口の見えない軍人としての生活を徒労と感じ、それへの鬱屈した気持ちやどうすることもできない窮境への諦念の気持ちが、このころの書簡に繰り返し記されている。その一方で彼が上記の引用のように、ナポレオンの脅威に対して高まる民族運動の気運を皮肉な調子で分析していることは、彼のコスモポリタン的世界観を愛国心との関連で導くうえでもきわめて重要である。そして彼のこのような客観的かつ批判的な姿勢は、愛国心がいわば偏狭なナショナリズムと化し、それが頂点に達したナポレオン戦争 Befreiungskrieg(1813-15)においても揺るぎないものであった:

「私にはもはや祖国というものはなかった、あるいはまだなかった－積極的に関与したわけではないが、1813年に起こった世界史的大事件は、私の心を引き裂いた。…… 私がかつて宿営地から初めて出陣したときに親友たちが私に向かって叫ばずにはいられなかった言葉－時代は剣を求めているのではない－をそのときばかりは私自身が口にした。しかしあのような民族運動がうねりをあげている最中で無為に傍観者でいつづけることは心身をすり減らすことである」[17]

「フランスを敵にまわして戦うときには、何かを求めて手に入れたいとは思わない。しかしドイツのために戦うときには、おそらく命を張って危険に身を晒すこともできただろう。そしてそうする心構えもできていたのである。…… その場合、旧兵役経験者の訓練を手伝うだろうし、農民戦争にでもなれば、喜んでそれに加わるかもしれないし、そこでともに死ぬこともいとわないかもしれない。とはいうものの、…… ベルリンに滞在することは、私にとって重苦しいものだった。こうした狂乱の時代にはおとなしく引きこもっていたい。自ら雄叫びを上げることは、嫌なことである」[18]

上記の引用からもわかるように、シャミッソーにも愛国心がまったくないというわけではなかった。ここで注目すべきは彼がフランス人ではなくドイツ人の立場で真情を吐露していることであり、それによると彼もまた自由意志に基づいて祖国を放棄していることがわかる。

愛国心に関する彼のこの姿勢は、偏狭なナショナリズムにときとして陥る愛国心を否定するコスモポリタン的世界観をもっていたルソーのそれときわめて似ている。

シャミッソーがあのように嵐の吹き荒れるベルリンに毅然と背を向け、その近郊のある田舎町に滞在し、自分の気持ちを紛らわせるために、そして彼の友人の子供たちを楽しませるために『ペーター・シュレミールの不思議な物語』を執筆したことは周知のとおりである。引き続きこの作品の内容をあえて概観的に叙述し、これに前で考察したことを前提とする解釈例を付け加える。

主人公ペーター・シュレミールは、想像を絶するほど裕福な商人であるトーマス・ヨーンの邸宅で催されたガーデン・パーティーを訪れる。そこで彼は、招待客の求めに応じて小さな袋の中から絆創膏、望遠鏡、トルコ絨毯、大きな天幕、そして装鞍された馬をも苦もなく次々に取り出すきわめて奇妙な灰色の服を着た男を目にする。その光景の不気味さに恐れをなし、ペーター・シュレミールが気づかれないようにその場を立ち去ろうとしたとき、その男があとを追いかけてきて、突然一つの契約をもちかける。それは湯水のように金貨が溢れてくる袋と影を交換するというものである。目の前の富に目が眩んでしまい、ペーター・シュレミールは軽率に自分の影を売り渡す契約に同意する。ところが影を失った途端、彼の目論みとは裏腹にたちまち道行く人々の中傷の嵐に晒される。彼の従者であるベンデルが必死になって秘密を隠そうと奔走する。その甲斐あって彼はペーター伯爵としてある庭師の娘のミーナと恋仲になるが、挙式の寸前で彼のかつての従者でもあったラスカルに秘密を暴露される。その結果、彼は一夜にして安らぎと幸せを失い、再び逃亡の身になる。ペーター・シュレ

ミールはこのころにはすでに社会の中で何不自由なく平穏に生きてゆくうえで影を失っていることが致命的な欠陥になっていることを痛感し、かつての軽率な判断を反省するようになっている。ちょうどそのころ、それは彼がきわめて奇妙な灰色の服を着た男に影を売り渡してから季節がひとめぐりしたころであったが、彼の前に再び因縁のその男が現れ、影を返してほしければ、その代わりに魂を売り渡せと迫る。ここでついに彼はその男の中にトーマス・ヨーンにも宿っていた悪魔の姿を見抜き、戦慄を覚える。彼は迷うことなくその求めを拒絶し、幸せな気持ちに浸ることができたのはまさに束の間でこれまで十字架のように重くのしかかってきたあの湯水のように金貨が溢れてくる袋を奈落の底に向かって憎しみとともに投げ捨て、その男とやっとのことで決別する。その後のペーター・シュレミールは、一歩足を踏み出せばそれが七里になるという不思議な靴を手に入れ、世界中をめぐってそこかしこに広がる不思議な自然を観察する。永遠に影を失っているため、もはや社会の中で平穏に生きることはできないものの、自然研究者として世界中に広がる不思議な自然を見てまわるという彼のたっての夢が実現し、心の中はむしろ穏やかになり、幸せな気持ちに包まれて余生を送る－

例えばこの作品を解釈するうえでその王道とも言えるトーマス･マンの解釈例を見てみると、そこでは影が人間の帰属性を象徴し、それを失うことは社会におけて根無し草になることを意味し、それによってこの作品は市民社会の中での疎外の物語であるとされる。この場合にもルソーの思想の影響が見られる。

『エミール』：

「……ほかの存在との物理的な関連において、ほかの人間との道徳的な関連において、自分を考察したのちに、かれに残されていることは、同じ市民として同じ市民たちとの社会的な関連において自分を考察することだ。そのためにかれはまず統治体[政府]一般の本質、さまざま

の統治形態を研究し、さらにかれが生まれた国の統治体を研究して、この統治体のもとに生活することが自分にとって適当かどうかを知らなければならない。なにものによっても廃棄されえない一つの権利によって、各人は、成年に達して自己の支配者になれば、かれを共同体に加入させている契約を破棄して、その共同体が成立している国を去ることもまた、自由にできることになるからだ」[19]

ここで表明されているのは、祖国を放棄する場合と同じく、自由な意思に基づいて社会契約を破棄してもよいということである。ペーター・シュレミールの辿った運命だけを考察すれば、たしかにルソーの思想が暗喩としてこの作品の太い柱になっていると言えなくもない。しかしとりわけこの作品に関していえば、テーマやモティーフを細分化すればするほど、解釈の袋小路に陥るだけであろう。この作品はシャミッソーの出口の見えない軍隊生活の徒労がその萌芽としてある偏狭なナショナリズムに対するアンチテーゼなのではないだろうか。あるいは存外シャミッソーの心の中に芽生えた理想としてのコスモポリタニズムを思わせぶりな彼独特のユーモアで表現したにすぎないのではないだろうか。ペーター・シュレミールの辿った運命とシャミッソーの愛国心をめぐる書簡等の記述を照らし合わせて考察すれば、シャミッソーも偏狭なナショナリズムにときとして陥る愛国心を否定するコスモポリタン的世界観を心の中で思い描いていたと考えられる。[20]

4

このようにシャミッソーは偏狭したナショナリズムを克服した先に見えてくる理想としてのコスモポリタズムを彼の代表作の中に描いていると考えられる。ナショナリズムとコスモポリタニズムの相克という文脈でこの物語をとらえるとき、主人公の影、および影の喪失は、本来単なる象徴にすぎず、実際のところはシャミッソーが精神的危機を克服するためにどうしても書かずにはいられなかった物語だったということが見えてくるので

はないだろうかではないだろうか。

注

1 Mann, Thomas: Chamisso. In: Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurter Ausgabe. Leiden und Größe der Meister. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt a.M. 1982. S.537.

2 『ペーター・シュレミールの不思議な物語』の影、および影の喪失の問題に関するシャミッソー研究の基本文献を下記のとおり挙げておく。Vgl. Wilpert, Gero von: Der verlorene Schatten. Variationen eines literarischen Motivs. Stuttgart 1978.; Freund, Winfried: Adelbert von Chamisso. Peter Schlemihl. Geld und Geist. Ein bürgerlicher Bewußtseinsspiegel. Entstehung-Struktur-Rezeption-Didaktik. Paderborn 1980.

3 『ペーター・シュレミールの不思議な物語』に解釈例を付け加えることは遅きに失した感があるが、「シャミッソーと同時代研究/シャミッソー『世界旅行記』研究」を研究課題とするうえでは何らかの解釈例を提示しなければならないと考え、ここでこの主題に取り組んだのはそのような理由による。

4 松村明編: 大辞林. 三省堂 1988 年. 880 頁.

5 有福孝岳、坂下恵他編『カント事典』. 弘文堂 1997 年. 295 頁を参照。「世界市民主義 Kosmopolitismus[独]」についてカントにはおよそ歴史哲学的用法、政治哲学的用法、そして人間学的用法があるが、ここではそれらには触れない。

6 「シャミッソーは、フランス、およびドイツ啓蒙主義の諸作品、とりわけルソーを熱心に講読することによって、彼の家系の貴族的伝統に背を向けたり、フランス革命によって生まれた新たな状況に適応したりするための精神的知識を身につけた。彼の初期に育まれた時代、および社会批評、伝統に対する嫌悪感、そして後に未開人を高く評価することには、自然や植物学への傾倒と同じように、ルソーの思想を集中的に受容したことがはっきりと見られる」: In: Hoffmann, Volker: Nachwort. In: Chamisso, Adelbert von: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Nach dem Text der Ausgaben letzter Hand und den Handschriften. Textredaktion Jost Perfahl. Anmerkungen, Glossar, der botanischen, zoologischen, geographischen, ethnischen Begriffe und Namenregister sowie Zeittafel und Nachwort von Volker Hoffmann. Bd. Ⅱ. München 1975. S.669.

7 宮ヶ谷徳三: ルソーにおけるパトリオチズムとコスモポリタニズム. In:

ヨーロッパにおけるコスモポリタニズムとナショナリズム. 小野理子他編 平成6·7·8年度科学研究補助金（一般研究B）研究成果報告書 神戸大学国際文化学部ヨーロッパ文化論大講座 1997年. 159-160頁. また本章における「ルソーのコスモポリタン的世界観」の考察は、本先行研究を参考にしていることをあらかじめ断っておく。

8 ルソー、ジャン・ジャック: 人間不平等起源論. 本田喜代治、平岡昇訳 岩波文庫 2004年. 107頁. 「幾人かの偉大な世界市民的な人々の魂」: quelques grandes âmes cosmopolites.

9 ルソー、ジャン・ジャック: エミール（上）. 今野一雄訳 岩波文庫 2006年. 27頁. 「世界主義者」: ces cosmopolites.

10 同上（下）. 221-222頁. 「かれ」は主人公エミールを指している。

11 Vgl. Chamisso, Adelbert von: Adelbert von Chamissos Werke/ Hrsg. von Julius Eduard Hitzig.- Unveränd. Nachdr.- Eschborn bei Frankfurt a. M.: Klotz Bd. 5/6. Leben und Briefe. Unveränd. Nachdr. der 5., verm. (und berichtigten) Aufl., besorgt von Friedrich Palm, Berlin, Weidmann, 1864. 1. Auflag. Frankfurt a. M. 2000. S.36-365., 374-396. 以下「Chamissos Briefe」と略記する。

12 Chamisso, Adelbert von: Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdekungs-Expedition in den Jahren 1815-18. Einleitend. In: Hoffmann, Volker: Nachwort. In: Chamisso, Adelbert von: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Nach dem Text der Ausgaben letzter Hand und den Handschriften. Textredaktion Jost Perfahl. Anmerkungen, Glossar, der botanischen, zoologischen, geographischen, ethnischen Begriffe und Namenregister sowie Zeittafel und Nachwort von Volker Hoffmann. Bd. II. München 1975. S.86. 以下「Chamissos Tagebuch」と略記する。

13 Chamissos Briefe. S.100.

14 Ebd. S.111.

15 これとときを同じくしてシャミッソーは、彼の鬱屈した心の内を隠喩的に表現しているとされ、後の代表作にテーマとモティーフが生かされる習作を執筆している。Vgl. 18.-25. 04. 1806:「アーデルベルトの寓話」Adelberts Fabel(1806); 22. 08.-22. 10. 1806:「幸運の袋と願いを叶える小さな帽子」*Fortunati Glücksäckel und Wunschhütlein*(1806).

16 Ebd. S.185.

17 Chamissos Tagebuch. S.88.

18 Chamissos Briefe. S.381-382.

19 ルソー、ジャン・ジャック: エミール（下）. 221-222頁. 「かれ」は主人公エミールを指している。

20　このようなコスモポリタン的世界観がオリエンタリズムにつながるという議論について、そしてそれに関連して、世界旅行における彼のコスモポリタン的世界観の発現の考察については、ここでは触れない。例えば、自然研究者として参加した世界旅行で出会ったサンドイッチ島の原住民に向ける視線には、ヨーロッパ中心主義に陥らないコスモポリタン的世界観の一端が見られる。Vgl. Akiyama, Daisuke: Chamissos *Reise um die Welt* als Erweiterung von Peter Schlemihls Weg. In: Herder-Studien XⅡ. Herder-Gesellschaft Japan 2006. S.145-163.

参考文献

Chamisso, Adelbert von: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Nach dem Text der Ausgaben letzter Hand und den Handschriften. Textredaktion Jost Perfahl. Anmerkungen, Glossar, der botanischen, zoologischen, geographischen, ethnischen Begriffe und Namenregister sowie Zeittafel und Nachwort von Volker Hoffmann. Bd. Ⅱ. München 1975.

Chamisso, Adelbert von: Adelbert von Chamissos Werke/ Hrsg. von Julius Eduard Hitzig.- Unveränd. Nachdr.- Eschborn bei Frankfurt a. M.: Klotz Bd. 5/6. Leben und Briefe. Unveränd. Nachdr. der 5., verm. (und berichtigten) Aufl., besorgt von Friedrich Palm, Berlin, Weidmann, 1864. 1. Auflag. Frankfurt a. M. 2000.

Chamisso, Adelbert von: Peter Schlemihls wundersame Geschichte. Mit einem Kommentar von Thomas Betz und Lutz Hagestedt. Frankfurt a. M. 2003.

松村明編: 大辞林. 三省堂 1988 年.

有福孝岳、坂部恵他編: カント事典. 弘文堂 1997 年.

ボーマン, ジェームズ、ルッツ-バッハマン, マティアス編: カントと永遠平和. 世界市民という理念について. 細野茂樹、田辺俊明、舟場保之訳 未来社 2006 年.

船越克巳他: 18 世紀西欧とコスモポリタンの思想と行動. ゲオルク・フォルスター研究. 平成 12~14 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）(2) 研究成果報告書 大阪府立大学総合科学部 2003 年.

小野理子他: ヨーロッパにおけるコスモポリタニズムとナショナリズム. 平成 6·7·8 年度科学研究補助金（一般研究 B）研究成果報告書 神戸大学国際文化学部ヨーロッパ文化論大講座 1997 年.

ルソー、ジャン・ジャック: 人間不平等起源論. 本田喜代治、平岡昇訳 岩波文庫 2004 年.

ルソー、ジャン・ジャック: 社会契約論. 桑原武夫、前川貞次郎訳 岩波文庫 2006年.
ルソー、ジャン・ジャック: エミール（上）（中）（下）. 今野一雄訳 岩波文庫 2005~2006年.
小笠原弘親: 初期ルソーの政治思想: 体制批判者としてのルソー. 御茶の水書房 1979.
小笠原弘親他: ルソー社会契約論入門. 有斐閣 1978.
吉沢昇: ルソーエミール入門. 有斐閣 1978.
カッシーラー、エルンスト: 十八世紀の精神: ルソーとカントそしてゲーテ. 原好男訳 思索社, 1989.9
モルネ、ダニエル: 十八世紀フランス思想: ヴォルテール、ディドロ、ルソー. 市川慎一、遠藤真人訳 大修館書店 1990.